

# サンシンジャー回想録 中国(上・下) 解説

一〇一二年三月発行 岩波書店

解説 米中関係を構築し続ける男

## 解説 米中関係を構築し続ける男 —「密使」から「守護者」への軌跡—

松尾文夫

ヘンリー・キッシンジャー博士の新著『キッシンジャー回想録 中国』(英文題名 *On China*)は、ユニークな価値を持つ傑作である。日本を抜いて世界第二位の経済大国にのし上がり、二十一世紀の世界で中心的な役割を演じることになった中国と米国との関係を、一九七二年のニクソン訪中の構築者である著者自らが語り、分析し、そして将来のあるべき姿まで提言しているからである。

特に第二次大戦後六七年を経ながらも、いまだにこの隣国、中国との間で不幸な過去を清算できず、本物の和解を果たしていない日本にとっては、持とうとしても持ちえない両国の関係が赤裸々に語られているという点で、必読の書と言つてもよい。いま日本同盟が普天間基地移転問題での立ち往生に象徴

される試練を迎えている折から、四一年前にニクソン・ショックという悪夢を経験している日本にとって、こうしたキッシンジャー博士の軌跡を追うこと自体、改めて日米関係の現実を見つめ直すこともつながると思うからである。日中関係については歴史的な記述がほとんどで、割かれているページは少ない。しかし、それだけに限られた行数のなかで記録されている毛沢東と著者との間の日本をめぐるやりとりは、いまもその重さがすしりと伝わってくる。

本書は、米国の中華研究の大御所であるエール大学のジョナサン・スペンス名誉教授が一〇一一年六月の「ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス」での書評のなかで、「ハイブリッド車」といみじくも表現したように、多くの顔を持つ。

スノーリンタビューは空振り

第一の頃は、過去四一年間の米中関係にかかわり  
続いている著者自らがその歩みを細述していること  
である。一九七一年以来、毎年中國訪問を欠かさず、  
その数は五〇回を超えるキッシンジャー博士の歴史  
の語り部としての筆はあふれるような情報、そして  
刺激的な知的アングルを提供してくれている。

やはりそのハイライトは、朝鮮戦争以来二年間  
お互に「敵」として激しく対峙してきた米国と中  
国が、文字通り世界の歴史を変える和解達成へと歩  
む第一歩となつた。著者による一九七一年七月の北  
京秘密訪問が実現するまでの一幕である。いわゆる  
「秘密文書」が公開されているわけでもない。引用  
した両国首脳の発言はすべて公開済みのものだと断  
りがついている。にもかかわらず、その現場にいた  
著者自らが再構築する世紀のドラマの決定版は、時  
を超えて興味深い。

悟して「遞交近攻」の戦略を発動し、文化大革命を始める直前の一九六五年二月の段階から、米国人ジヤーナリスト、エドガー・スノーとのインタビューを通じて米中対話の用意ありとのシグナルを米国側に送り始める。スノーは一九三六年六月、延安にまで尋ねていって毛沢東を取材、一九三七年に著書「中国の赤い星」をロンドンで出版、全世界に「毛沢東の中国」の存在を伝えたいわゆる「井戸を掘った」古い友人である。

どと踏み込んだ発言をしたインタビューの原稿が、ニクソン政権側に流れることを期待して三ヶ月以上も発表を差し止める細工が凝らされる(結局、一九七一年四月三〇日号のライフ誌に掲載された)。しかし、この直接の引用が禁じられた原稿は、スノーを中国側の宣伝要員と見ていたワシントンで粗末に扱われ、ニクソン・ホワイトハウス、少なくともキッシンジャー補佐官のもとには届かなかつたという。

だが、米国側も、結果としてこうした毛沢東の動きに対応していた。ニクソンは早くも一九六九年八月の国家安全保障会議で、はつきり中国がソ連との戦争で「粉碎」されれば、それは米国の国益に反するとの判断を打ち出した。「米国の外交政策において革命的な瞬間だつた」と著者はコメントしている。これを受けて中ソ衝突の場合には、米国は中立の態度をとるもの、最大限中国寄りの姿勢をとるとの指令をホワイトハウスから発したという。

ルイニン・ソ連大使が自ら著者のオフィスに度々現れて説明してくれたおかげで、ホワイトハウスとし ても知るところとなり、事態を注目することになつたのだという。冷戦時代の常識を破る出来事だった という。その結果、ランド・コーポレーションから は、中ソ国境の衝突はソ連の侵略の結果で、やがて 中國の核施設への攻撃が行われるであろうという分 析まで入った。こうして米国は、この二つの共産主 義大国の衝突が米国の国益に影響を与えるとの立場 を全世界に明らかにすることとなり、米国の方針は 中立ではなく自らの戦略上の権益に従つて行動する との警告が、当時のリチャードソン国務次官の演説 で発信された。事实上、ソ連に対する牽制のメッセージ だつた。こうした米国 の態度のためか、やがて ソ連の先制攻撃態勢は縮小され、結果として米国と 中国が最終的には国交回復を目的とする接触を開始 する心理的な条件が生まれる。

## 「メヌエット」を踊るように

就任前から「中国を国際社会の外に放置しておく余裕はない」(一九六七年一〇月のフォーリン・アフェアーズ誌寄稿)との認識を持っていた「第一級の機会主義者」(デービッド・リースマン)ニクソンにとっては、願つてもない展開だった。

中ソ関係にくさびを打ち込むのみならず、インドシナからの米軍の「名譽ある撤退」という名の「敗北」を覆い隠す、またとない大義名分を与えてくれることになったからである。

こうして、著者が「メヌエットを踊るように」と形容した動きが太平洋の両側でゆっくりと始まる。一九六九年未から、世界各地でそれまでお互いに口もきかなかつた米中の外交官たちが言葉を交わすようになる。一九七〇年二月には、過去二〇年間、一三四回ものむなしい応酬に終始していたワルシャワ大使級会談が再開され、米国側の交渉担当者に対しでは中国当局者との直接会談に北京かワシントンで心じる用意があるとのメッセージを繰り返し中国側

いたワルシャワ会談はキャンセルされたままとなつた。

## 反戦デモは「米国の革命」か

この行き詰まり状態の打破にイニシアチブをとつたのは、著者が「悲観的な戦略家」あるいは「地政学的な好機を見いだし、大胆に行動する頑迷な反共主義者」とクールに距離を置いて評するニクソンだつた。ニクソンは一九七〇年七月に行つた世界一周の各国訪問旅行の折、バキスタンとルーマニアの首脳に、中国とのハイレベルの接触を求めているとのメッセージを北京側に伝達してもらつてもかまわない、と伝えた。この反応が同年一二月になつてあらわれた。同月八日、周恩来から「毛沢東と林彪のチエックを受けている」との注つきの手書きの書簡がイスラマバードを経由してバキスタンの駐米大使の手でホワイトハウスに届けられた。内容は「台湾と呼ばれる中国領からの米国派遣部隊の立ち退き」について話し合うために、米国の特使を北京に招待し

に伝えるよう指示が出された。

しかし、ここでニクソンのホワイトハウスは、国務省のワルシャワ会談担当者の手痛いサボタージュを受ける。米国側の提案を受けて、中国側から「中米間の緊張を緩和し、抜本的に関係を改善する」ためワルシャワとは別のチャネルを通じた会談を検討する用意があるという、前例のない提案があつたのに対し、米側担当者は、こうした大きなアプローチに対応できず、一切反応しなかつた。

ニクソンは、ワルシャワ会談代表団からの報告に接して、「彼らは赤ん坊が生まれる前に殺してしまう」と、怒りを爆発させたという。しかし、ニクソンも中国がどこまで米国との関係改善に本気なのか、まだ測りかねており、この怒りを公にすることは控えた。かたや毛沢東も米軍のベトナムでのエスカレーションの行方とこれに対する米国内でのかつてない反戦デモの高まりに、もししかしたらこれが「正真正銘の世界革命」の始まりなのかどうかと考える時間が必要としたと見られる。同年五月に予定されて

たい、というものだつた。過去二〇年間、北京から届いた最も穏やかな文章だつたと著者は述懐する。一ヶ月後、ルーマニア・ルートからも同じような書簡が到着する。この書簡では、ニクソンは既に訪問したベオグラードやブカレストと同じく北京でも歓迎されるだろうと踏み込んであつた。

この二つのルートに対する米国の回答では、特使派遣には同意するものの、議題は台湾問題に限定せず、「中国と米国との間に横たわる広範囲な問題」を話し合いたいとだけ述べられ、ニクソンへの招待は敢えて無視された。そしてその後、三ヶ月間、中国側からの返事は何もなかつた。その空白の理由については、依然として反戦デモを基盤とする「米国の革命」の可能性を検討していたこと、外交方針をめぐる政治闘争など毛沢東のリーダーシップにとつての国内基盤の調整が必要だったからではないか、と著者は語つている。

## ピンポン外交という奇策

しかし中国は、四月に入つてピンポン外交という奇策で、米国側が待つ米中接触に同意するとのメッセージを発信した。名古屋で開かれていた世界卓球選手権大会に、文化大革命開始後初めて参加していなかた中国の選手が突如、米国チームを中国に招待したのである。著者によると、この接触について最初、中国外務省は否定的だった。しかし、毛沢東は二日間考えた結果、ある晩遅く不眠症治療のための睡眠薬の影響で朦朧となりながらも、看護婦を呼び出し、外務省に電話して、「米国チームを中国に招待する」ように伝えることを命じた。看護婦が「睡眠薬を服用した後の言葉は効力がありますか」と尋ねたのに対し、毛沢東は、「そうだ、すべて有効だ。早く行動しないと手遅れになる」と応じたとのエピソードを、著者は香港で一九九五年に出版された『歴史の真実——毛沢東の身辺工作人員の証言』を引用して紹介している。

一九七一年四月一四日、米国の若い卓球選手たち

めぐる血なまぐさい暗闘が進行中だったと見られ、一年後の発表では、林彪はこの年の九月に山海關飛行場からモンゴル方面に脱出、墜落して死亡する。四人組が力を持つなかでの文化大革命の終焉を目指す毛沢東、ベトナム戦争の「名誉ある撤退」の実現を反戦運動の高まりのなかで迫られるニクソン——まだ相まみえぬ両首脳はそれぞれに国内問題を抱えながら、著者と周恩来にすべてを託すことで、この米中和解の一幕は終わる。冷戦真っ盛りの時代、文字通り「驚天動地」の事態だった。

有名な、腹痛を理由にした報道陣対策が成功して、著者の「密使」としての北京入りが世界の目を盗んでパキスタン経由実現するのは約一ヶ月後の七月九日のことである。北京滞在時間四八時間、著者と周恩来、つまり米国と中国だけが持つことができたこの特別な時間は四年経った今も、両国の関係の新しい起点として記憶されていることを忘れてはならない。

## レーガンにも協力

本書が持つ第二の顔は、キッシンジャー博士がこの一九七一年七月に周恩来とともに幕を開けた米中の再構築という大きなドラマの出演者の一人として、今も引き続き舞台の上に乗っているという事実である。著者は、ニクソン訪中の意義について、常に手をかける必要がある世界の均衡が回復されることであるとしたうえで、「そのプロセスでは、お互いが自らの利益の守護者になる」と述べている。過去四一年間、著者はまさにこの「守護者」の道を歩んでいるといえる。それはそのまま、世界第二の経済大国にのし上がった中国の歩みに付き添う記録でもある。

著者は一九七三年九月、ニクソンがウォーターゲート事件で追い込まれるなかで国務長官を兼任、フロード政権下でも留任、一年後、大統領補佐官のリストは退くものの、そのまま国務長官として一九七年のカーター政権への政権移譲まで留まる。特筆すべきは、中国側で一九七六年に周恩来、毛沢東

は、人民大会堂で周恩来が「あなた方は米中両国の人民の関係に新たな一章を開いた」と演説するのを聞いた。その一五日後、周恩来から四月二一日付の手書きのメッセージがパキスタン大使経由でホワイ

トハウスに届いた。キッシンジャー大統領補佐官からジャーズ国務長官、あるいは大統領本人の誰でも歓迎する所であり、関係回復の一つの条件として、台湾および台湾海峡からの米軍の撤退のみをあげ、台湾との統一については触れられていないかった。

五月一〇日、米国側は周恩来のニクソン招待を受諾しつつ、著者が大統領名代として、米中首脳会談を準備する周恩来との協議のため、秘密裏に北京を訪れる所答える。六月二一日に戻ってきた周恩来の返事は、ニクソンが中国の招待を「喜んで」受諾したこと毛沢東に報告したことを伝え、自分が北京で著者を迎えることを確認してきた。しかしこの時の中国側の回答から、林彪の名前が消えていた。著者はこのことにはほとんど注意を払わなかつたという。

しかし、既にその頃、北京では林彪のクーデターを

——と「七一年のドラマ」の相手役が相次いで鬼籍に入った後も、著者は、その後を引き継いだ華国鋒、鄧小平、胡耀邦、趙紫陽、江澤民、そして現在の胡錦濤に至る歴代の中国最高指導者と、時には元大統領補佐官、元國務長官、時にはアドバイザー、コンサルタント、そして最後は「友人」としての様々な顔を使い分けながら緊密な接触を保っていることである。八八歳の高齢ながら、革命も知らず、文化大革命も幼年期の記憶しかなく、中国が最も経済的に成功した時代に育った「第五世代」の指導者たちとの対話の重要性を訴え、自ら実践している。(一〇)二年二月に次期国家主席として鳴り物入りで米国を公式訪問した習近平ともその一ヶ月前に北京で開かれたニクソン訪中四〇周年記念集会にそろって主賓として参加、「共通の利益」を基礎とする米中関係の発展を確認し合つた。習訪米は見事なまでにその延長線上で進行した。

もちろん米国側でも、直接仕えたニクソン、フォードに加え、カーターから現在のオバマに至る歴代

大統領に対して、党派を問わずこの対中国人脈を生かしての「守護者」としてのアドバイスをいとわない。たとえば、一九八〇年には、台湾防衛問題での強硬姿勢を売り物にしたレーガン候補の意を受けて、まだ選挙戦だけなわの九月の段階で、当時の柴沢民ワシントン駐在中國大使と会い、レーガン当選後の台湾問題をめぐる米中間の対立打開の事前折衝を行う。結果として著者が「米中両国の優れた政治手腕を立証するもの」と自賛する「台湾問題の解決を先送り」するだけのあいまいな工程表で両国は合意、一九八一年八月、いわゆる台湾問題をめぐる第三回ミニニケの調印にこぎ着ける。(上海ミニニケ)(一九七二年)、国交正常化ミニニケ(一九七九年一月)とともに、いまだに米中関係を政治的に支える基幹文書の構築に一役買つたわけである。

#### 鄧小平の勇氣

一九七四年の国連資源特別総会に出席した際、ニューヨークでの著者主催の夕食会でその実力者ぶり

に接した鄧小平と著者の度重なる心を開いての対話が、中国型社会主義市場経済という現在の中国の経済大國化に大きく貢献する一九七八年末からの改革開放路線の原点となつていて重要な点である。経済大國化を実現した今日の中国は「鄧小平の遺産だ」と著者は断言している。

「毛沢東の哲学的な長広舌や寓話と、周恩来の優雅な専門家たたき」に慣れっこになつていて著者は、鄧小平の「浅い、きまじめなスタイル、彼が時に抉む皮肉な合いの手、哲学への嫌悪と現実的なものへの偏愛といったものに慣れるには時間がかかった」と述懐する。しかし、時が経つにつれて、この英語を理解し、小柄で果敢な人物を大変尊敬するようになつた。彼は信念を曲げず、世の中の激動に直面して平衡感覚を失うことなく、この国をやがて変革する人物だった——と最大級の評価を贈る。

特に一九七五年九月の「科學技術工作を前面に出さなければならない」と題した演説で、科學技術の重要性、職業意識の回復、個人の技量や主導性の発

励——といった当時の文化大革命に対するアンチテーゼをはつきり口にし、改革開放政策の運動に火をつけたことが重要だと指摘する。しかも一九七八年六月の全軍会議での演説で、こうした運動に「实事求是」「理論と実践の統一」といった毛沢東思想のお墨付きを与えることに成功したことが大きいと分析している。現在まで続く改革開放路線に正統性を与えたというわけである。

しかし、著者によると、「实事求是」などといったスローガンは、毛沢東革命にはほとんど表に出なかつたもので、こうした毛沢東発言の「まとまりのない断片」を「時にはわざと文脈を無視して」整理し引用し、毛沢東に「プラグマティストとしての姿を与える」ことに成功したのが鄧小平だという。彼は数十年間にわたつて党内抗争をくぐり抜けてきた古強者として、人民解放軍内に強い人脈を築いた上で、イデオロギー上の論争を政治目的のために役立てるすべを心得ており、完全復活を果たした頃の鄧小平の演説は「イデオロギー的柔軟さと政治的暖

味の名人芸だ」と言い切っている。

著者は、鄧小平がこうした指導力を確立できたもうひとつの理由として、彼が毛沢東の遺言で国家主席に指名された華國鋒が毛沢東の無謬性を前提にして唱えた「二つのすべて」路線に挑戦し、70%は正しく、30%は誤り、という毛沢東のスターリンに対する評価を持ち出して、毛沢東もこの「70-30」評価が妥当だと考へを示したことと挙げてある。毛沢東思想を支えていたラジカルズムとブラングマティズムのうち、はつきり後者を選び、今も中國共産党の公式の毛沢東評価となつてゐる「70-30」路線を一九七七年の段階で明言した鄧小平の「勇気」のおかげで、改革開放政策は成功する基礎を築いたと著者は位置づける。

周恩来との別れ  
この頃、キッシンジャー博士は、「一九七一年のドラマ」の共演者であり、「およそ六〇年間にわたる私の公人としての生活の中で彼より人の心をつか

んで離さない人物に会つたことがない」とする周恩来との「別れの儀式」を受ける。著者は彼の身の上に政治的な問題が起きているということを、一九七三年一月の毛沢東との会談の際、同席した周恩来が今までになく毛沢東にへりくだる態度を見せたことから探知していた。また、著者がその後の鄧小平との会談の場で、周恩来の言葉を引用し、高く評価を感じたという。がんを理由に周恩来が公の場に姿を見せなくなつた一九七四年の一月、著者との最後の別れが演出された。

迎賓館のような「病院」に著者の家族とともに招かれ、約二〇分間対面した。医者に激しい活動を禁止されているとして政治や外交問題の話は一切せず、著者はこの扱いを「米中関係を二人で話し合う時代は終わった」との政治的なメッセージの発信だと受け止めた。一九七六年一月、事実上の政治的な失脚の中がんで死亡する周恩来に対し、著者は一九七七年の別れが演出された。

一年七月以来のすべての米側との交渉の場で、毛沢東に対する究極の忠誠心を貫き通した周恩来がこうした終焉を迎えることには、「ひしひしと胸に迫るものがあった」と珍しく感情を吐露している。  
二人が求めた米中國交正常化が実現するのは、その二年後の一九七九年一月、民主党のカーター政権下である。

#### 乗り切った天安門危機

キッシンジャー博士の「守護者」としての真骨頂は、改革開放路線の旗手、鄧小平が一九八九年六月四日の天安門広場での流血弾圧の主役となって登場し、米国世論から「天安門広場の虐殺者」として激しく批判される状況を修復する作業にかかわることで發揮される。

天安門事件に対する米国世論、そして議会の反発は激しかつた。ニクソン訪中後の初代北京連絡事務所長としての実績を持ち、一米中関係は中国の統治システムの問題とは関係なく、米国の死活的な国益

に関わる」との認識を持つていたジョージ・H・W・ブッシュも、政府高官の中国との接触禁止、軍事協力と警察・軍用機器の売却停止、世銀や国際金融機関による新規借款反対などの制裁措置を発表せざるを得なかつた。  
しかし、ブッシュは著者が「網渡り」と表現する行動に出る。鄧小平との長年の友好関係を生かし、自らの禁止命令に違反しながら、友人としての親善を鄧小平死に送り、抗議活動に参加した学生たちへの寛大な措置を呼びかけ、「過去一七年間にわたつて忍耐強く築き上げられてきた米中の死活的な関係を台無しにしないために」と特使の北京派遣を提案する。鄧小平は翌日受諾、七月一日、スコウクロフト大統領補佐官とイーグルバーガー国務副長官が米国の標識のないC-141輸送機で極秘裏に北京に飛ぶ。中国空軍はこの正体不明の飛行機を撃ち落とすべきかどうか、当時の楊尚昆国家主席に問い合わせたという。

そして、この高官接觸が袋小路に入り込むと、す

ぐ著者の出番となる。今度は中国側の要請もあり、ブッシュ、スコウcroftとも協議の上、一月北京入りする。待っていたのは、当時も今も変わらない人権問題をめぐる米中間の根深い対立だった。欧米型民主主義と個人の権利を求める反体制運動の指導者であった物理学者、方勵之夫妻は、天安門広場での政府側の実力行使直後、米国大使館に駆け込み、とどまり続けた。中国側は夫妻に逮捕状を出し、双方はにらみ合いを続けていた。出発直前、スコウクロフトから伝えられた「キッシンジャー側から方夫妻問題は出さないで欲しい」との要望を著者は守っている。帰国の挨拶にいつた際、鄧小平の方から突然、「方夫妻問題を含め、事態をセットで手打ちしたい」との提案が飛び込む。この発言の後、鄧小平は椅子から立ち上がり、二人だけで話したいということを示すために、二人の間にあつたマイクを取り外した。

この日の鄧小平による一括解決の提案をきっかけに、方夫妻は米国または第三国に出国し、これに合

る。今度は上海市長時代から面識があった江沢民の体制の「守護者」としてである。鄧小平から「彼は自らの考え方を持ち、高い手腕を持つ」との折り紙付きの推薦を受けた江沢民は総書記就任直後の一九八九年一月、著者を招く。

「笑みをかかさず、外国人に対しては論点を強調するために、英語、ロシア語、時にはルーマニア語を交えて話し、時には公的な会談さえも中断し、歌を歌う」と著者が描写した江沢民は、最初から改革開放政策の継続を確認する。そして、米国への「ドアは常に開いている。米国からのいかなる前向きな姿勢にも応える用意がある。われわれには多くの共通した利益がある」と言い切った。さらに天安門事件については、「あるような事態に対する精神的な準備」ができおらず、政治局は分裂し、学生にも党にもヒーローはほとんどいなかった。党は無力であり、分裂していた」と率直に語ったという。

一九九〇年にまた中国を訪れた著者に、江沢民は

こう「講義」したという。「中国と米国は、一六四

わせて米国は制裁を解除し、大型経済協力プロジェクトを立ち上げ、総書記に就任したばかりの江沢民を米国に公式招待する——などの取引を盛り込んだ「一括解決」をめぐる交渉が始まり、八ヵ月後に決着する。こうして天安門事件後わずか一年で、米国と中国はまた、キッシンジャーが一役買つて、一つの危機を乗り越える。

しかし、このころ、世界はベルリンの壁崩壊に始まるソ連、東欧の共産主義システム全体の自滅現象を経験する。天安門事件のさなかに訪中したゴルバチヨフは、中国からの経済援助、さらには消費必需品の供給まで求める。そしてこの新たな「驚天動地」の事態に、中国が改革開放政策の成功の手応えと同時に、残り少ない共産主義国としての孤立への危機感を高める中で、鄧小平の時代が終わりを迎える。著者は鄧小平から直接引退の決意を聞く。

#### 江沢民から受ける「講義」

しかし、キッシンジャー博士は、さらに働き続け

八年（主権国家による最初の国際条約、ウエストファリア講和条約締結の年）以来の欧洲の伝統的な国家システムを範をとった新たな国際秩序に向けてともに仕事をすべきだ。キッシンジャー博士にとつてこの論理は、ハーバード大学での博士論文をそのまま処女作として一九五七年に「回復された世界平和——メソチルニヒ、カースルレイ、そして平和の問題——八一二—一八二二年」と題して出版して以来、自分が主張し、政府当局者時代にはその実践につとめてきたテーマである。「私がすでに数十年も前に書いていたこと、つまり主権国家を基礎とした国際社会のシステムについて、毛澤東の後継者が私にレクチャーするとはなんとも皮肉なことだ」と著者は述懐する。このころ江沢民と側近たちは、ソ連崩壊について「政治改革」を「経済改革」に先行させた失敗であると見なし、「中国にはゴルバチヨフはいない」と断言し続けたという。

つまり江沢民は、共産主義の勝利から四〇年を経て社会主義市場経済で成功しつつある中国としては、

従つて、本書で、著者がこうした中国政治の「負」の部分にはほとんどと言つていいほど触れておらず、沈黙を守っていることには批判が出ている。事実、著者は「〇八憲章」で知られる中国の有力な人権活動家、劉曉波氏が二〇一〇年のノーベル平和賞を受賞した事実そのもののみならず、依然として牢獄にある事態に一行も割いていない。中国当局が今も国内のインターネットメディアで民主化グループと激しいいたちごっこを演じているジャスミン革命のインバクトについても、短く一行だけ課題として触れられているだけである。

アメリカの保守系メディアを代表するウォール・ストリート・ジャーナル紙の書評は、著者が一九七三年のベトナムでの暫定和平協定締結の功績で同じノーベル平和賞を受賞していることも引き合いに出して、この劉氏無視を問題視し、「単なる道徳的なエラーを超えるものだ」と厳しく批判している。しかし、キッシンジャー博士にとっては、こうした保守派からの批判は織り込み済みのようだ。本書

国境を越えた価値観の輸出をやめる代わりに、国内の人権問題や政治体制の方については他国からは注文をつけられたくないとの立場を鮮明にしたわけである。著者によれば、この江沢民の主張は内政不干渉、力の均衡に基づく国際秩序の安定という「一九五七年以來のキッシンジャー・ティーゼに忠実に従い、主権国家、中国の特色を持つ社会主義と「人民の民主」への許容を米国を始めとする西側各国に求めていた。その意味で、米国からの「介入」をめぐるこうした対立、そしてしおき合いは、米中関係の「守護者」である著者にとって、今も続く試練である。著者は、その後、「最惠国待遇」の延長問題でまたこの「袋小路」に入り込み、中国との間で緊張状態を続けていたクリントン政権が、中国经济の驚異的な急成長もあって、第一期を終える頃には、人権問題と「地政学的な課題」とのバランスをとる現実路線に転換したことを探る評価する。江沢民は一九九七年一〇月、ハワイ真珠湾のアリゾナ記念館での「第一次世界大戦で一緒に日本と戦った、米国と中

国の犠牲者への献花」を旅のスタートに米国公式訪問を果たし、一〇年近くの米中間の対立に終止符を打つ。

#### 劉氏無視には批判

もちろんこうしたキッシンジャー博士の北京指導者との蜜月関係には、米国内での批判も決して少なくない。今もネオコンを始めとする保守派の間で根強い米国的价值観の世界に対する押しつけ、つまり米国型民主主義の普及こそが米国の義務であり、その実現のためには干渉も辞さないという立場と真正面からぶつかる。中国共产党の一党支配、言論統制、民主化運動指導者の拘束、追放といった江沢民がいう「人民の民主」のコンセプトに対する反発は、元切り上げ問題を含む貿易上の不均衡への産業界、組合勢力などからの「安い中国の輸入製品が米国人の職を奪う」との根強い不満もあって、保守派のみならず、米世論全体に依然として中国に対する一定の違和感を生み出していることも一つの現実である。

では正面からの論破、説得を試みている。

著者は、クリントン政権下での「取引」を実例に、その代表的な「中国理解」の論理を「私は米国の価値観を広めよう」という観点から戦おうとする人々に敬意を表する。だが外交政策は目標とともに、そこにはいたる手段をも定めなければならない。もしその手段が国際的な枠組み、あるいは自国の安全保障上重要と考えられる外交関係の許容範囲を超えた時は、選択をしなければならない。われわれがしてはいけないことは、その選択の幅を狭めることである」と要約している。

米中関係の「守護者」は、どこまでも「確信犯」である。

#### 第一次世界大戦前との相似性

第三の顔は、キッシンジャー博士の使命感あふれる米中関係の「守護者」としての活動が、母校ハーバード大学で政治学教授として教鞭をとった国際政治学者、とくに一九世紀以降の外交史の専門家とし

ての理論によって支えられていることである。著者は、この「クロウの覚書」との相似性が現実は、この顔を本書の終章で、意外な歴史的文書を引用して現在の米中関係との相似性を論じるところで見せる。

取り上げたのは、ドイツ生まれでドイツ人の母親を持つイギリスの外交官エア・クロウが一九〇七年に残した「イギリスのフランスおよびドイツとの關係の現状についての覚書」と題する外務省宛の文書である。クロウはこの覚書で、一八七一年のビスマルクによるドイツ統一後の歐州情勢について、ドイツが海軍力を始めとする軍事力の増強につとめる結果、「英帝国の存在と相容れなくなる」構造が生み出されており、そこではお互いにどのような協力や信頼を生み出すことも不可能で、もはや外交術が入り込む領域はないと分析し、七年後の第一次世界大戦を予言する。著者は、空母建造など海軍力を中心に軍備増強を続け、南シナ海領海問題でも潜在的な火種を抱える現在の中国と米国が同じような道を歩むのかどうか、と問いかける。

著者は、この「クロウの覚書」との相似性が現実のものとなる危険として、米国、中国双方の世論にそれぞれ「ネオコン」、中国の場合は「勝利至上主義者」と呼ばれる声が存在することを挙げる。中国の場合、二一世紀に入つて「不機嫌な中国——偉大な時代、壮大な目標、内部の苦惱と外部の挑戦」(二〇〇九年)と、「中国の夢——ポスト米国時代の大國思考と戦略的位置付け」(二〇一〇年)という極めて民族主義的な二冊が、政府の検閲を通過して販売され、ベストセラーとなつて事実に懸念を示す。

一方、米国側でも、自らの安全保障を脅かす非民主主義の国には体制の変革、つまりイラク戦争でゴリ押ししたレジーム・チェンジを求めるしかないというネオコン・グループが米国政治で一定の影響力を持つ以上、この双方の「ネオコン現象」は互いに連動して、中国と米国は「クロウの覚書」が予言したような「マランソン競争」、「世紀の決闘」、最後は「ゼロサムゲーム」という不毛な選択に追い込まれる。

る可能性は否定できない、と著者は危惧する。

### 太平洋共同体の提唱

しかし、著者は、「中国海軍の増強に対してもアメリカがその同盟国とともに軍備の増強で対応するといつた第一次世界大戦前と同じような「落とし穴」にはまり込むのを避けなければならない」と警告はするものの、最後は楽観的である。

その理由として、鄧小平、江沢民に統いて改革開放政策を軌道に乗せ、中国の国際社会入りを実現させたとして、著者が高く評価する胡錦濤－温家宝政権の中核に位置し、著者とも長時間の会談を重ねた戴秉国が二〇一〇年一二月に「平和的発展の道を歩む」と題して発表した論文を引用する。戴秉国はこの中で、二〇一〇年の段階でも「億五〇〇〇万人が貧困ライン以下で生活している中国の後進性と社会的格差の拡大を挙げて、中国脅威論を否定している。そして、著者は自ら一人子政策の影響に触れ、

なる極端な高年齢化社会の到来というすさまじい不安定要素を指摘して、この戴秉国テーマに肩入れしている。

つまり、キッシンジャー博士は「このような大きな国内問題を抱える国家が安易に、ましてや自動的に戦略的対立ないしは世界支配の追求に自ら乗り出すことはない。大量破壊兵器が不可知な最終結果をもたらす現代の軍事技術の存在は、第一次世界大戦前の状況との重要な違いとなつていて、『クロウの覚書』の懸念再現の可能性を否定する。

したがって、著者は、今の米国と中国との関係は、「現実的に互いに何を求めていくか」という点に行きつくとして、協力関係を構築するというよりも、ともに可能な領域では協力しながら自国の課題解決に取り組むこと、つまり対立を最小限に抑え、互いの関係を調整し、補完できる利害を特定し、育成していく「相互進化」を推進していくことが重要だと説く。そして最終目標として、米国が「アジア國家」であるとの明確な認識の上に立つて、中国に日

本などを含めた、太平洋で結ばれるすべての国が参加する太平洋共同体の構築を提唱する。

オバマ大統領が二〇一一年一月、ハワイでのAPEC首脳会議に続くオーストラリア・ダーリングでの演説で米海兵隊の常駐体制を発表、「太平洋國家」としての米国を再宣言し、中国の海軍力増強にアジア、太平洋諸国間で高まる懸念に応えて「力の均衡」を意識した一石を投じたことは、このキッシンジャー・ティーとオバマ・ホワイトハウスとの距離の近さを示唆したものとして興味深い。

#### 北朝鮮危機を予測

今、キッシンジャー博士は習近平とのチャンネルまで確立し、その「守護者」としての地位は順風のように見える。毛沢東が著者に「一〇〇年待つてもよい」と言った台湾問題も馬英九総統再選で、「基本政策は平和的統一と一国二制度」(温家宝首相)とする中国との共生が進んでいる。

しかし、著者は本書の終盤で二つの長期的な懸念

を隠さない。

第一は、米中経済の相互依存が高まらないで、人元の過小評価が米国内での雇用喪失につながるとの米国世論や議会での論議を呼び、選挙ごとに政治的な争点の一つになっている現実である。著者はここで中国が大幅な人民元の切り上げに踏み切らなければ、通貨操作ではなく、中国企業の倒産を防ぐ成長のために必要だと観点から、あまりこの人民元切り上げ問題や著作権保護問題で中国への要求を強めると、結果として中国経済のアジアブロック化を助長し、米国にブーメラン現象となつて戻ってくるとも述べ、やはり相互利益という観点から太平洋共同体構想を推進することに出口を求めるべきだとしている。しかし、米中経済関係が今や切っても切れない一方で、それぞれの国内で抱える矛盾には、人権問題をめぐる理念的な「しのぎ合い」と同様に、簡単な出口がないことも忘れてはいけないと立場

である。

第二には、著者が二〇一一年一二月に起つた金正日の急死に伴う朝鮮半島情勢不安定化の可能性を本書執筆の段階から注目している。「支配一族のトップが共産主義統治の経験すらなく、ましてや国際関係の経験もない二七歳の息子への権力移譲に着手し始めた」として「予測不能ないしは不可知な理由で内部崩壊する可能性が絶えずある」と予測する。

そして「もし北朝鮮が核武装すれば、日本や韓国だけでなく、ベトナムやインドネシアなどのアジア諸国までが最終的に核クラブ入りし、アジアの戦略的展望が様変わりすることになる」として、「中國の指導者はそのような結果には反対している。同様に中国は、北朝鮮の壊滅的な崩壊も危惧している。なぜなら、そうなれば六〇年前に中国が阻止しようとして戦つたのとまったく同じ状況が国境地帯に再現される可能性があるからだ」とここでも中国の立場への理解を示している。この「予測不能ないしは不可知」な事態に対処するためには、米国と中国の

協議、そして六カ国協議の場が重要だとアドバイスする。中国最高指導部との間に深いチャンネルがあり、北朝鮮側ともニューヨーク、北京での接触の実績があることから、米中関係の「守護者」としての仕事の延長で著者の出番があるようにも思える。

#### 「引き出物」としての日米安保条約

最後に、こうしたキッシンジャー博士が構築した米国と中国の関係の中での日米関係の位置付けを、正確にとらえておかねばならない。

一九七一年の秘密訪問以降、毛沢東、周恩来に対する役割も果たす」との論理で説得し、やがて受け入れさせることに成功した日米安保条約、つまり日米同盟は、今やその最終目標として「太平洋共同体」まで視野に入れた著者の青写真の中に組み込まれているからである。現在、普天間基地の移転問題でその負の部分が顕在化している沖縄の米軍基地問題をめぐる日本のジレンマも、突き詰めると、こ

のアイロニーに満ち満ちた日本、米国、中国の三極関係の落とし子であることが浮き彫りになる。本書では、ページ数は限られながらも、そのアイロニーの原点ともいえる毛沢東と著者との生々しいやりとりが紹介されている。両者のやりとりは「会談記録」として、既に米外交文書館(ARCUS)で公開されている。その全文を取り寄せて、著者が本書で引用していない部分を加えると、日本にとつては重い実像が明らかになる。

まず、一九七二年一月の毛沢東との初会談の席上で、ニクソンが「日本を中立、無防備の状態にしておくより、当面米国と一定の関係を持たせる方がお互いのために良いことではないのか」と問い合わせたのに対し、毛沢東は「こうした面倒な問題すべてについて私は深入りしたくない」とはぐらかす。しかし、米国側は、著者が「日本問題は毛沢東との和解の戦略上、主要な構成要素になることになつていった」と述べているように、一九六九年一月のニクソン政権発足直後から水面下で構築していたシナリオ

が何か画策したいと思うような衝動を、われわれはあまり起させねばなりません。

**毛** すなわち、彼ら「日本」をソ連側に追いやらないということだ。

結局、中國としては、日米安保体制という日本に対する米国の核を含む軍事的な傘が、日本軍国主義の復活を阻止する上でも有用であるとの米国の説得を受け入れると同時に、ソ連との対決のためにも米国とともに日本も味方につけておく価値があるとの二段構えのプラス要素を計算した上で戦略的な決定をくだしたということである。つまり、日米安保体制が米国によって、ニクソン訪中、対中和解のいわば「引き出物」として中国側に差し出され、毛沢東もこれを対ソ戦略の一部に組み込んで上機嫌で受け入れたというわけである。現在の沖縄米軍基地問題もここから始まる。

キッシンジャー博士は、一九七三年三月三日付のニクソン宛て秘密メモの中で、次のように誇らしげに報告している。このメモは一〇〇三年以降、米国

に基づき、沖縄米軍基地を抱え込んだ日米安保体制を、中国の日本軍国主義復活に対する不安を除去する切り札として使う。一九七一年七月のキッシンジャー秘密訪問以来の周恩来首相との接触を通じて、この論理を売り込み、日米安保条約は台湾防衛を含め中国を敵視する条約であり、日本軍国主義の再興の引き金を引くものだ、とのそれまでの公式発言を繰り返す中国側を説得する。

その結果、毛沢東が一九七三年一月、既に国務長官も兼任していた著者との会談の際に、この米国側の見解を了承したことを見明らかにした上で、次のようないいとこ話を紹介している。

「毛 日本について話したい。今回あなたは日本を訪問し、数日間滞在する予定だね。

キッシンジャー 主席は日本のことではいつも私をしかります。私は主席の言うことを真剣に受け止め、今回は二日半滞在します。主席の言ふことはまったく正しい。日本が孤立し取り残された感じがないことが極めて重要です。日本

立公文書館で公開されているものの、本書では触れられていない。

「過去二〇カ月間のわれわれの説得の結果、周恩来は今や非公式の場では、日米安保条約が日本の拡張主義と軍国主義に対する歯止めとなつていてこれを認めている。彼は北京政府が最近は日本との対応において、安保条約を攻撃するようなことは全くしていないことを指摘していく……」

この頃から日本軍国主義の再興を懸念し、日米安保を非難する中国のマスコミによる激しい論調はびたりと止まつた。

「日本人のメンツを傷つけるのではないか」

「主席は日本のことではいつも私をしかります」という甘えた表現で著者が毛沢東と話しているくだりは会談記録全文を読むと、本書には記載はされていないものの、一九七三年一月の会談の際、毛沢東との間で交わされた以下のやりとりを受けたものであることがわかる。

この時も、毛沢東は著者に対し「あなたは日本経由で帰国すると聞いていますが、日本では彼らともう少し時間をかけて話すべきではないか。一日だけというのは彼らのメンツを傷つけるのではないか」と日本側への配慮を求めていた。キッシンジャー博士は「今度の旅行はこの北京での会談が主要目的で、また別に東京を訪問する予定です」と答え、毛沢東は「それがいい。そしてはつきり彼らに言っておいてほしい。日本人のソ連に対する感情は決して良くないはずだ」と述べている。

この後、著者が日本人の対ソ感情について、「彼らは複雑な心境です」と答えると、毛沢東は田中角栄首相が前年の日中首脳会談の際、周恩来に対し、ソ連が第二次世界大戦で日本にやったことは、自ら首をくくろうとしている人間の足もとの椅子を蹴飛ばすようなことだった、と語ったといったエピソードを披露、さらに周恩来まで交えながら、「中国としては日本がソ連と接近するより、米国と仲がよい方を望む」(毛沢東)、「大平外相がモスクワに呼ばれること」(毛沢東)、「大平外相がモスクワに呼ばれることを報告しておきたい。

毛沢東は国境を接している国々では、どんなに国内情勢が苦しいときでも、中印戦争(一九六二年)、朝鮮戦争(一九五〇—五三年)、中ソ国境紛争(一九六四年)、中越戦争(一九七九年)と武力行使をいとわなかつたとした上で、その他の国々には「毛沢東は物理的な力の代わりに、イデオロギー闘争と心理的認識を用いる独特的スタイルを導入した。それは中国

が世界の中心だという見方に世界革命で少々味をつけ、野蛮人たちを巧みに操る中国的伝統を用いた外交を加味したもので成り立っていた。そこでは詳細な計画と相手側を心理的に支配することに非常な注意が払われていた」と著者は分析している。

まさに著者に「しかられた」と受けとらせる日本のメンツ重視の姿勢は、この「相手側を心理的に支配する」一手が発動された実例であろう。毛沢東の後継者たちもこの「中国的伝統」は引き継いでいると見て間違いない。

### 「永遠のリズム」に敗れた毛沢東

この「中国的伝統」について、著者は本書の最初の五つの章を使ってユニークな考察を行っている。「文字に記録されただけでも」四〇〇〇年の歴史を持つ中国において、英國とのアヘン戦争で負け、香港島を割譲させられても敗戦とは思わず、歐州列強からの蒸気機関など最新工業技術を贈られても「おもちゃ」としか受け止めなかつた清王朝の皇帝

たち。その「中国が世界の中心だ」との天命意識の残滓の中で、毛沢東が多分にその伝統を生かしながら、その価値観を変える革命にいかに挑戦し、いかに「継続革命」を構築し続けたかを分析している。著者は、毛沢東について、「対外政策ではレーニンよりも孫子に負うところが大きかった」、「孫子の弟子の一人」と踏み込んだ上で、「彼は中国古典の読書と表向きは軽侮している中国の伝統から、ひらめきを得ていた。外交政策の戦略を立てる時、毛沢東はマルクス主義理論より、伝統的な中国の著作を参照していた」として、孔子以下の儒教の書物、中國の歴代王朝の勃興と没落について記した正史「二十四史」、「孫子の兵法」、「三国志演義」、その他の戦争と戦略に関する古典、「水滸伝」のような冒險と反抗の物語、ロマンスと優雅な不義密通の小説「紅楼夢」なども読んだと紹介している。そして、中国の伝統的なギャンブルゲームであるマージャン、中国将棋、囲碁は、食うか食われるかの戦いを演じる

チエスとの対比で、毛沢東のグリラ戦略に影響を与えた、と分析している。

しかし、キッシンジャー博士は、最後はクールには敵対から同盟へ、ソ連に対しては同盟から敵対へと立ち回り、結果として冷戦の「勝者」としての立場に立つことに成功したにもかかわらず、結局は、

中国四〇〇〇年の伝統を変えるところまでは行かなかつたからだという。

「従順であると同時に依存はしない。言いなりになると同時に独立独歩である。家族の将来と相容れない自分を考える命令を実行するにあたっては直接の抗議ではなく、その実行を躊躇することで制限を加えようとする」という四〇〇〇年の歴史の中で培ってきた中国人の生活の「永遠のリズム」を変えることはできなかつたのだという。その実例として、毛沢東の死からほぼ四〇年、毛沢東の後継者たちが今や豊かになつた中国社会を「和諧社会」と形容し、

全世界に中国語を教える孔子学院を開設し、二〇一年初めには、毛沢東記念堂の見える天安門広場近くに孔子像が設置された事実をあげる(その後近くの国家博物館の内庭に移された)。

その毛沢東に「七〇—三〇」の評価を与えて天安門広場にその肖像を今も掲げ続ける中国は、これからどのような道を歩もうとしているのか――。

#### 日米より六九年も前に始まつた米中関係

毛沢東に「ニクソン・ショック」を同情され、そのメンツを心配された日本が今、心しなければならないのは、毛沢東も裏切られたという中国の「永遠のリズム」が米国という国と出会つたのは、日本への「黒船」来航よりも六九年も早い一七八四年七月のことだという単純な歴史的事実である。それは、その名も「中国皇后号」と名づけられた一隻の米国商船が、ニューヨークから四カ月かけてカントンの港にたどり着いた時である。

以後、建国期の米国財政を支えた対中国貿易に続

いて、一八三〇年からは宣教師団の組織的な派遣が始まり、その米国人宣教師が書いた米國紹介文がアヘン戦争敗北に学んで編集された魏源の『外國事情』が

#### イドブック、「海國圖志」の一部として幕末の日本

に伝わり、吉田松陰を含む志士たちの必読書となる。

明治維新翌年の一八六九年に開通した米国の太平洋岸と大西洋岸を結ぶ大陸横断鉄道の建設は、珠江デルタからの中国人労働者の参加なくしては完成できなかつた。一九世紀に入り、米国の義和團事件賠償金による大学建設、太平洋戦争での抗日同盟、延安での米代表団との交流、國務省中国白書による中国内戦不介入宣言——と続き、朝鮮戦争からニクソン訪中までの二二年間の敵対期間をのぞけば、日本とは対照的に前向きの関係には事欠かない。この米国と中国との四世紀にまたがる接触の時間の中で、キンシングジャー博士の秘密訪問が窓を開けた過去四一年間は、そのほんの一部にすぎない。

本書の一番の価値は、日本が明治以降、ほとんど無視してきたこの米国与中国との間の、日本には持

ち得なかつた関係の重さをかみしめさせてくれることかもしれない。

#### 松尾文夫

(まつお・ふみお)

一九三三年生まれ。學習院大學政経学部政治学科卒業後、共同通信社入社。ニューヨーク、ワシントン特派員、バンコク支局長、ワシントン支局長、論説委員、常務取締役、共同通信マーク・シッピ代表取締役社長などを歴任。二〇〇一年にジャーナリストとして復帰。「ニクソンのアメリカと中国——そのしたたかなアプローチ」(『中央公報』一九七一年五月号)で米中和解を予測した。著書に「ニクソンのアメリカ」(サイマル出版会、一九七二年)、「銃を持つ民主主義——「アメリカ」という国」のなりたち」(小学館、二〇〇四年、第五回日本エッセイスト・クラブ賞)、「オバマ大統領がヒロシマに献花する日」(小学館、二〇〇九年)など。

訳者あとがき

二〇一二年一月一六日、北京の釣魚台迎賓館では「ニクソン訪中および上海コミュニケ発表四十周年」の記念集会が開かれていた。中国外文学会、中国国際問題研究所などが共催したこの集会の主賓は、本書の著者であるキッシンジャー博士と、秋には一三億人のトップへの就任が確実な習主席国家副主席だった。

博士が、米中接近という世界の流れを変える戦略転換のために極秘訪中した一九七一年七月当時、習主席は一八歳。中南海の奥深くで行われた世紀の外交接触など知る由もなく、下放先の陝西省延安市延川県梁家河の農村で、黄土高原での慣れぬ農作業に悪戦苦闘していた。その青年が今や、二一世紀の米中関係を担おうとしている。親子ほども年の違う次期指導者のスピーチに耳を傾ける博士は感慨深げだった。毛沢東、周恩来以来の歴代中国首脳との追憶や、習主席時代の米中関係がどうなるのかといった思いが、脳裏に去来していたのかもしれない。

中国经济が鄧小平モデルによる改革開放政策の成功で、ドイツを抜き、ついには米国の背中が見えるところまで来た現在、世界が大きな関心を寄せているのは、米中が仕切る世界はどうなるのか、米中はうまくやっていけるのか、文明の対立は起きないのかという点であろう。特に太平

洋を挟む両国の間に位置し、双方と緊密な関係を持つ日本は、米中関係の行方に注目せざるを得ない。

本書はこうした問題を考える際に避けて通れない「中国の特異性」について、大きなヒントを提示している。すなわち、本書で詳述された過去四〇年余りの米中関係史はまさに、米国外交が中国の特異性とどうかかわってきたかを示す軌跡であり、欧米の価値観で構成される現在のグローバル・スタンダードと、中国の特異性とは共存可能かというテーマにとつて、大いに参考になるからである。

では、中国の特異性とは具体的には何を指すのであろうか。博士は、第1章を「中国の特異性」に充てたほか、随所でそれに触れている。いくつか拾つてみると、中国は（一）長い歴史を持つために、過去の出来事や教訓から物事を判断する、（二）自らを世界の中心であり卓越した存在と考える、（三）時間の観念が長く、長期戦略による相対的な優位を追求する、（四）西歐流の近代化は中国の文明や社会秩序を損なうと考える、（五）本能的に自立更生、自給自足の独自性を主張する、（六）侵入した異民族を中国化させるような文化力や忍耐力を持つ、（七）事物は流動的、相対的であり、矛盾や不均衡の存在は自然と考える、（八）完全な征服より調和を、直接的な勝利より心理的優位を狙う、（九）米国とは異なり自らの価値観を世界に広めようとはしない——などの傾向があると指摘されている。

中国では数年前から「普遍的価値」をめぐる論争が続いている。自由、平等、人権、民主といった概念を、中国も人類が目指すべき価値として認めるかどうかの論争である。二〇一〇年にノーベル平和賞を受賞した劉曉波氏ら民主派は、普遍的価値を認めて政治改革を推進すべきと主張する。これに対し保守派は「普遍的価値とは西側の価値観の押し付け」であり、中国には独自の価値観があると批

判する。劉曉波が服役中であることが示すように、中國内で優勢なのは、中国は欧米とは異なるとの主張である。この論争も結局は、中国の特異性に絡むものと言える。もし普遍的価値を認めるなら、中国も最終的には欧米と類似した世界秩序を目指すことになる。しかし認めないと、中国の国家目標は欧米とは異なることになり、米中関係の将来に影響を与えるかねない。

終章で米中関係の今後について考察したキッシンジャー博士は、両国は相互進化と太平洋共同体の創設で共存を目指すべきだと主張している。確かに、米ソ冷戦時代は経済活動もそれぞれの経済圏の中で行われていた。グローバル化した現在は、中国が米国債の最大の保有国（二〇一一年一月現在）であり、米国が中国の最大の輸出相手国（同年）であるように、たとえ価値観が異なっていても、それを理由に対立してはいられない時代になつていてる。

新華社電によると、冒頭の集会でのスピーチで、習副主席は「中米関係が発展した内在的原動力は両国の共通利益」であると分析、今後も両国民の根本的利益から出発し、ウインウインの精神で協力関係を建設しようと訴えた。キッシンジャー博士は、両国は共通利益を基礎に協力を展開すべきで、意見の食い違いを制御不能にしてはならないと指摘した。両者がともに強調したのは、米中の「共通利益」だった。長い歴史過程で形成された中国の特異性は、簡単に変わるものではない。ますます進展するグローバル化の中で、米中の共通利益と中国の特異性とがどう絡み合つて展開していくのかは、二一世紀の国際情勢に影響する底流として、注目していかねばならないだろう。

8. Phillip C. Saunders, "Will China's Dream Turn into America's Nightmare?" *China Brief* 10, no. 7 (Washington, D.C.: Jamestown Foundation, April 1, 2010), 10 (quoting Liu Mingfu [劉明福] *Global Times* article).
9. 劉明福,『中国の夢——ポスト米国時代の大國思考と戦略的位置付け』(北京, 中国友誼出版公司, 2010年), 24頁; Chris Buckley, "China PLA Officer Urges Challenging U.S. Dominance," Reuters, February 28, 2010, <http://www.reuters.com/article/2010/03/01/us-china-usa-military-exclusive-idUSTRE6200P620100301> を参照。
10. Richard Daniel Ewing, "Hu Jintao (胡錦濤) : The Making of a Chinese General Secretary," *China Quarterly* 173 (March 2003): 29-31.
11. 戴秉国,「平和的発展の道を歩む」(北京, 中国外交部, 2010年12月6日).
12. Adele Hayutin, "China's Demographic Shifts: The Shape of Things to Come" (Stanford: Stanford Center on Longevity, October 24, 2008), 7.
13. Ethan Devine, "The Japan Syndrome," *Foreign Policy* (September 30, 2010), [http://www.foreignpolicy.com/articles/2010/09/30/the\\_japan\\_syndrome](http://www.foreignpolicy.com/articles/2010/09/30/the_japan_syndrome) を参照。
14. Hayutin, "China's Demographic Shifts," 3.
15. 以下を参照。Joshua Cooper Ramo, "Hu's Visit: Finding a Way Forward on U.S.-China Relations," *Time* (April 8, 2010). Ramoは米中関係を解釈する枠組みとして、生物学の分野から相互進化の概念を採用した。

本書は共同通信社外信部の同僚であつた岩瀬彰、塙越敏彦、松下文男、中川深、横山司が分担して翻訳し、横山司、塙越敏彦が最終的なチェックに当たつた。われわれが翻訳に当たるきっかけとなつたのは、解説の執筆者で米中関係に造詣の深い先輩の松尾文夫氏の紹介だつた。松尾氏と編集作業でお世話になつた岩波書店の馬場公彦、中山永基の両氏に謝意を表したい。

一〇一二年二月二〇日

塙越敏彦